

【原 著】

中学校の学級集団内の教育的相互作用と集団同一視を測定する尺度の作成

河村 茂雄\* 武蔵 由佳\*\*

本研究は、日本の学級集団内の教育的相互作用を測定する学級集団教育的相互作用測定尺度（中学校版）および学級集団同一視測定尺度（中学校版）を作成することを目的とした。対象は、研究1は中学生923名（男子466名、女子457名、1年生282名、2年生342名、3年生299名）、研究2は中学生808名（男子400名、女子408名、1年生248名、2年生388名、3年生272名）であった。学級集団教育的相互作用測定尺度を因子分析したところ、集団士気、斉一性・自治体制、愛他性、集団凝集性、P機能、M機能、集団圧の7因子が抽出され、信頼性が確認された。次に、学級集団同一視測定尺度を因子分析したところ、教師に対する同一視、友人に対する同一視、クラスに対する同一視の3因子が抽出され、信頼性が確認された。さらに学校生活意欲尺度との関連を検討した。

キーワード：学級集団教育的相互作用測定尺度、学級集団同一視測定尺度、中学生

【問題と目的】

平成19年より文部科学省は全国学力・学習状況調査を実施し始めた。その結果は新聞等のマスコミによって成績の上位から県別にランキングされて報道され、社会的な注目を集めている。近年はその影響もあり、各県の教育委員会では児童生徒の学力の向上を中心的な教育課題の一つと定め、学校現場ではその対応に力を注いでいる。例えば、少人数指導、土曜日の補習授業、教員の授業力向上の取組、家庭学習の充実などである。

このような中で、教員の授業力向上の取組に関連して、授業が展開される学習環境である学級集団の状態を良好なものにし、児童生徒の学習意欲の向上や学び合いの促進を図ることで、学力の向上を図る取組も見られるようになってきた（狛江市教育委員会, 2014）。学級集団の風土や雰囲気は子どもの学習活動全般に影響を及ぼすことは、Graham & Golan(1991)が子ども同士の比較よりも、子ども自身の学習の改善や進歩が強

調される教室環境の方が、子どもの教材の習得効果が高いことを指摘し、河村・武蔵(2008a, 2008b)も220学級を対象にして学級集団の状態を独立変数として取り上げ、児童生徒間に一定のルールと良好な人間関係であるリレーションが同時に確立している満足型学級、すなわち児童生徒相互が建設的に関わりまわっている学級では、いじめの発生数が少なく、かつ、児童生徒の学習の定着率が高いことを実証的に明らかにしている。

児童生徒の学習活動を促進するような影響をもつ学級集団の状態を捉える試みも、組織や職場の日々の行動に関して、明示的または黙示的に存在している「べし、べからず」といった規則、集団規範である組織風土（早津, 1995）の考えを導入し、学級全体の持つ雰囲気や学級風土(classroom climate)として質問紙で調査する方法が整備されてきた。例えば、CES(Classroom Environment Scale; Trickett & Moos, 1973, 1995)やCAS(Class Atmosphere Scale; Silbergeld, Koeing & Manderscheid, 1975, 1976), LEI(Learning Environment Inventory; Fraser, Anderson & Walberg, 1982)などである。これらの質問紙は、Moos(1979)の提唱する組織風土の3領域である「関係性」「個人の発達と目標志向性」

\* 早稲田大学 教育・総合科学学術院

\*\* 盛岡大学

「組織の維持と変化」に対応する構成であった。

根本（1981）は子どもの人格を目的意識的に学級集団のなかで発達させるという考え方は、欧米では比較的弱く、米国では適応主義が根底にあるために人格発達よりもむしろ行動変容ないし人格矯正という考え方が強いと指摘した。つまり、日米では「学級」という存在の学校教育における意味は同じとは言えず、学級全体をアセスメントする視点は、米国の経営学を取り入れた先行研究をそのまま日本の学級研究に当てはめるだけでは不十分であるという見解である。そして、根本（1983）は独自の学級環境の調査方法としてCSS（Classroom Structure Scale）を作成した。河村（2010a）も、米国の学級は、子ども個々の学習の定着に主眼がおかれ、学習集団としての機能体の面が主になっているが、日本の学級は最低一年間構成されるメンバーが固定され、そのメンバー集団を単位にして、生活活動、学習活動、子どもたち同士の関わり合いを通した、意識的な心理社会的な発達の促進を、その存在の目的に有している。日本の学級は、子どもたちの学校生活・活動におけるベースとしての生活共同体の面が基盤にあり、その上に学習集団としての機能体の特性を持たせているのであり、そのような学級集団の状態を捉えることが必要であると、「学級集団教育的相互作用測定尺度」と「学級集団同一視測定尺度」の小学校版を作成し、その関係を明らかにした（河村・武蔵，2012a）。これらの尺度は、小学校16校の4、5、6学年の30学級を対象に、学級という集団が児童に与える影響、学級集団内の教育的相互作用を、1学級に対して先行研究で学級集団の形成上変化が大きいと指摘のある学期初めの5月、学級編成から3ヵ月後の7月、夏休みを経て学校行事が一段落する11月、学年末の2月の年間4回調査して分析し、学級集団の状態が良好と認められた8学級を抽出し、その8学級に共通に認められる学級集団内の教育的相互作用の要因（河村・武蔵，2012b）を尺度化したものであった。

河村・武蔵（2012a）の尺度は学級担任制度をとる小学校の学級を対象にして作成されたものであった。中学校では小学校と比較して不登校の出現率が急増するなど、学級集団の問題は小学校と比較してもより深刻なことが想定される。先行研究で明らかにされている良好な学級集団の状態や様々な集団内の作用を測定す

る尺度があれば、教師が学級経営を展開して行く上でまた、授業改善を図っていく上で、観察法以外の指針となる情報が得られ、より効果的に展開することができると思われる。

本研究は、教科担任制度をとる中学校の学級を対象にして河村・武蔵（2012a）をふまえて、学級集団内で生起している教育的相互作用を測定する尺度を作成することを目的とした。具体的には、学級集団内の生徒の学習や対人関係形成、集団活動にコミットする意欲、そのための方法やスキルをモデル学習する効果、集団適応などに影響を与える作用を測定する尺度である。項目内容は、河村（2012）が30学級について1年間を通して行った学級集団の様態の記録と、在籍するすべての生徒を対象に行った学級生活満足度と学校生活意欲度に関する標準化された心理検査の結果から導いた、生徒の学級生活の満足度と意欲、学習の定着が良好な学級集団（以後、満足型学級集団、と表記する）の状態像、学級集団内での教師と生徒や生徒間での相互作用の態様に関する記述（Appendix 1）を尺度化することであった。特定された学級集団は自治的で、かつ、共同体的な雰囲気を持つ傾向があり、それぞれの特性を支える学級集団内の教育的相互作用と所属する生徒たちの学級集団への同一視の高さが認められた。したがって、作成する尺度も、学級集団内の教育的相互作用の高さを測定する尺度と、所属する生徒たちの集団同一視の高さを測定する尺度をそれぞれ作成することとする。また、それらの学級集団の状態には、日本の学校現場の教師たちの、近年の学習指導要領に準拠した学級経営が反映されていると考えられる。

## 【方法】

**調査対象** 調査協力の下承が得られた中学校6校をランダムに2つのグループに分け、学級集団内の教育的相互作用の高さを測定する尺度（研究1）と、所属する子どもたちの集団同一視の高さを測定する尺度（研究2）をそれぞれ作成した。

**調査時期** 2013年10月～2013年12月

**手続き** 各学校長に調査依頼をし、各校依頼1ヶ月以内の実施を期限として回収した。調査用紙は本調査が学校の成績に関係がないこと、担任の教師および友達

に回答の内容が公開されることがないことを明示した。さらに担任教師には、実施の手順・注意事項のプリントの通りに実施することを依頼し、生徒の回答用紙は渡した封筒に入れ、その場で密封してもらい、生徒に余計な不安がかからないよう配慮した。

## 研究1

### 【目的】

研究1では、学級集団内の教育的相互作用の高さを測定する尺度を作成することを目的とした。

### 【方法】

**調査対象** 3校 923名 (男子 466名, 女子 457名, 1年生 282名, 2年生 342名, 3年生 299名)

**調査内容** 調査対象の生徒に2つの尺度を実施した。1つは本研究者と心理学を専攻する大学院生3名, 現職教師2名により河村(2012)をもとに内容を検討した学級集団内の教育的相互作用を測定する学級集団教育的相互作用測定尺度であった。評定はともに「4:とてもそう思う」から「1:まったくそう思わない」までの4件法である。もう1つは、生徒の学級や学校場面における意欲を測定する、標準化された尺度である「学校生活意欲尺度(スクールモラルスケール)(中学生用)」(河村, 1999)であった。評定は「5:とてもそう思う」から「1:まったくそう思わない」までの5件法である。単純加算により各因子の得点を算出する。

### 【結果】

#### 1. 学級集団教育的相互作用測定尺度の因子分析結果

学級集団教育的相互作用測定尺度に対して、最尤法・Promax回転による因子分析を行った。因子負荷量が.40に満たない10項目を削除し、43項目に対して再度因子分析を行った。固有値の推移と解釈可能性から7因子解を採用し、因子負荷量の高い順に各因子5項目ずつの35項目を最終的に採択した。結果をTable 1に示す。第1因子は「このクラスになってよかった、と思っている人が多い、と思いますか」などの項目が高い負荷を示し、「集団凝集性」の因子と解釈した。第

2因子は「クラスがだらけたとき、しっかりやろう、と声をかけてくれる人がいる、と思いますか」などの項目が高い負荷を示し、「P機能」の因子と解釈した。第3因子は、「このクラスは、学級全体で活動するとき、先生がいなくても自分たちだけでやれることが多い、と思いますか。」などの項目が高い負荷を示し、「斉一性・自治体制」の因子と解釈した。第4因子は、「このクラスにいて、クラスのきまりや目標を守ろう、という気になりますか。」などの項目が高い負荷を示し、「集団圧」の因子と解釈した。第5因子は、「このクラスは、いろいろな活動で、より高い目標を目指している、と思いますか。」などの項目が高い負荷を示し、「集団士気」の因子と解釈した。第6因子は、「このクラスは、親切な人が多い、と思いますか」などの項目が高い負荷を示し、「愛他性」の因子と解釈した。第7因子は、「このクラスでは「一緒に遊ぼう」と声をかけてくれる人がいる、と思いますか」などの項目が高い負荷を示し、「M機能」の因子と解釈した。因子分析の結果をもとに構成した各下位尺度の信頼性係数は、「集団凝集性」が $\alpha=.931$ 、「P機能」が $\alpha=.903$ 、「集団士気」が $\alpha=.825$ 、「斉一性・自治体制」が $\alpha=.923$ 、「M機能」が $\alpha=.841$ 、「愛他性」が $\alpha=.889$ 、「集団圧」が $\alpha=.864$ であった。よって、学級集団教育的相互作用測定尺度の信頼性が確認された。

#### 2. 学級集団教育的相互作用測定尺度の男女差および学年差

学級集団教育的相互作用測定尺度の7つの下位因子と学年、性別との関係を検討するために、各因子について学年(3)×性別(2)の分散分析およびTukey法による多重比較を行った(Table 2)。なお、有意な交互作用は認められなかったため、主効果の検討を行うことにした。第1因子「集団凝集性」では、学年の主効果が有意で、1年生<2年生=3年生であった(これ以降、多重比較の結果、群間にみられた有意差は不等号(<)で、有意差がないことは符号(=)を用いて表す)。第2因子「P機能」は学年の主効果が有意で、1年生<2年生<3年生であった。さらに性の主効果も有意で、女子の得点が高かった。第3因子「斉一性・自治体制」、第4因子「集団圧」、第5因子「集団士気」は学年の主効果が有意で、1年生<2年生<3年生であった。第6因子「愛他性」は学年の主効果が有意で、1

Table 1 学級集団教育的相互作用測定尺度（中学校版）の因子分析結果

項目	因子						
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
<b>F1 集団凝集性</b>							
このクラスになってよかった、と思っている人が多い、と思いますか。	.978	-.033	.029	-.007	-.034	-.078	.045
できればずっとこのクラスでいたい、と思う人が多い、と思いますか。	.796	.041	.088	.065	-.049	.032	-.130
このクラスは、楽しいと思っている人が多い、と思いますか。	.770	.006	-.073	-.038	.164	.003	.074
このクラスに来るのが楽しみだと思っている人が多い、と思いますか。	.750	.024	.006	.007	.004	.087	.018
このクラスの思い出はずっと大事にしたいと思っている人が多いと思いますか。	.628	.055	.021	.151	.090	.050	-.090
<b>F2 P機能</b>							
クラスがだらけたとき、しっかりやろう、と声をかけてくれる人がいる、と思いますか。	.043	.940	-.021	-.008	-.047	-.048	-.094
このクラスでは、さぼっている人に、しっかりやろうと、声をかけてくれる人がいる、と思いますか。	.004	.924	-.030	.030	-.061	.052	-.137
このクラスでは、「時間を守ろうよ」、「責任を持って仕事をしよう」などを、みんなに声をかけてくれる人がいる、と思いますか。	.006	.732	.137	.010	-.066	-.164	.174
このクラスでは、もっと頑張ろうと、みんなを励ましてくれる人がいる、と思いますか。	.000	.726	-.056	.026	.083	.145	-.021
このクラスでは、いろいろな活動で、「こうやろうよ」と、リーダーシップをとれる人がいる、と思いますか。	-.027	.664	-.046	-.045	.115	-.044	.167
<b>F3 斉一性・自治体制</b>							
このクラスは、学級全体で活動するとき、先生がいなくても自分たちだけでやることが多い、と思いますか。	.042	-.032	.771	-.066	.127	-.120	-.011
このクラスは、先生がいなくても学級のルールを守っている、と思いますか。	.056	-.004	.724	.085	-.052	-.008	-.020
このクラスは、自分たちで話し合っているいろいろな活動を進めていくことが多い、と思いますか。	-.071	-.025	.586	-.026	.179	-.011	.094
このクラスは、自分の勉強、係りの仕事が早く終わった人は、自分から次にやることに取り組んでいる、と思いますか。	-.039	.013	.444	.072	.004	.097	.121
このクラスは、先生がいなくても、同じように行動する人が多い、と思いますか。	.130	.059	.428	-.123	-.048	.241	.099
<b>F4 集団性</b>							
このクラスにいと、クラスのきまりや目標を守ろう、という気になりますか。	-.004	.068	.064	.881	-.029	.019	-.125
このクラスにいと、勉強や運動を、自分なりに頑張ろうという気になりますか。	.044	.016	-.049	.805	.024	-.041	.058
このクラスにいと、クラスの友達を大切にしよう、という気になりますか。	.031	.002	-.165	.670	.066	.140	.133
このクラスにいと、みんなと一緒に頑張ろうという気になりますか。	.136	-.036	.042	.662	.020	.027	.101
このクラスにいと、きちんと係り活動などをやろう、という気になりますか。	.094	-.014	.171	.598	-.029	-.054	.117
このクラスにいと、クラスのきまりや目標を守ろう、という気になりますか。	-.004	.068	.064	.881	-.029	.019	-.125

Table 1 の続き

<b>F5 集団士気</b>								
このクラスは、学級全体に明るく楽しい雰囲気がある、と思いますか。	.208	-.102	-.061	-.105	.684	.020	.117	
このクラスは、運動会などの学校行事に、学級全体で協力して取り組んでいる、と思いますか。	-.034	-.016	.184	.053	.653	-.050	-.040	
このクラスは、いろいろな活動で、より高い目標を目指している、と思いますか。	.007	.068	.301	.111	.485	-.015	-.142	
このクラスは、授業やいろいろな活動に、熱心に取り組んでいる、と思いますか。	-.097	.078	.333	.084	.476	-.040	-.104	
このクラスは、お互いに協力しあって活動している人が多い、と思いますか。	-.019	.003	.201	-.010	.469	.240	.005	
<b>F6 愛他性</b>								
このクラスは、親切な人が多い、と思いますか。	.044	-.073	-.068	.059	.000	.857	.008	
このクラスは、みんなで助け合うことが多い、と思いますか。	.042	-.026	.030	.025	.047	.806	-.001	
このクラスは、困っているとき、助けてくれる・はげましてくれる人が多い、と思いますか。	.002	.081	-.090	.049	.102	.683	.078	
このクラスは、カギ口が少ない、と思いますか。	.128	-.015	.279	-.073	-.153	.492	-.007	
このクラスは、みんなのために行動してくれる人が多い、と思いますか。	.105	.112	.157	.002	.078	.461	.006	
<b>F7 集団性</b>								
このクラスでは、「一緒に遊ぼう」と声をかけてくれる人がいる、と思いますか。	.027	-.081	.052	.012	.027	-.016	.776	
このクラスでは、元気がないとき、「どうしたの」と声をかけてくれる人がいる、と思いますか。	-.070	.079	.012	.089	-.068	.082	.692	
このクラスでは、「～さん、すこいね」などお互いに認め合う雰囲気がある方だ、と思いますか。	.023	.208	.136	.071	-.019	.004	.446	
このクラスでは、学級全体を明るく雰囲気にしてしてくれる人がいる、と思いますか。	.147	.132	-.191	.007	.352	-.077	.434	
このクラスでは、グループ活動のとき、一人ぼっちの人がいないように、気を使ってくれる人がいる、と思いますか。	.081	.131	.192	-.017	-.119	.174	.401	
	α 係数	.931	.903	.825	.923	.841	.889	.864
因子間相関	F1	—						
	F2	.638	—					
	F3	.591	.635	—				
	F4	.748	.715	.641	—			
	F5	.668	.627	.600	.716	—		
	F6	.778	.704	.689	.756	.704	—	
	F7	.720	.728	.549	.737	.628	.766	—

Table 2 学級集団教育的相互作用測定尺度（中学校版）の2要因分散分析結果

	1年生		2年生		3年生		主効果		交互作用
	男子 (n=134)	女子 (n=148)	男子 (n=187)	女子 (n=155)	男子 (n=145)	女子 (n=154)	学年差 F値	性差 F値	
集団凝集性	13.99 (3.68)	14.96 (3.72)	15.73 (3.37)	16.30 (3.52)	16.21 (3.47)	15.98 (3.59)	19.26*** 1<2, 3	3.43 n.s.	2.14 n.s.
P機能	14.37 (3.52)	15.03 (3.75)	14.94 (3.60)	16.11 (3.60)	16.39 (3.37)	17.07 (3.04)	25.00*** 1<2<3	13.03*** 男子<女子	0.56 n.s.
斉一性・ 自治体制	13.36 (3.43)	13.94 (3.32)	14.14 (3.54)	14.66 (3.27)	15.94 (2.71)	15.63 (3.10)	32.66*** 1<2<3	1.50 n.s.	1.78 n.s.
集団圧	14.73 (3.62)	15.44 (3.80)	15.68 (3.86)	16.25 (3.46)	16.77 (3.18)	16.78 (3.60)	15.88*** 1<2<3	3.21 n.s.	0.76 n.s.
集団士気	15.52 (3.10)	16.07 (3.05)	16.45 (3.09)	16.73 (2.65)	17.70 (2.56)	17.42 (2.96)	27.58*** 1<2<3	0.88 n.s.	1.57 n.s.
愛他性	13.53 (3.88)	14.46 (3.42)	14.82 (3.69)	15.88 (3.25)	16.42 (3.00)	16.57 (3.22)	39.21*** 1<2<3	10.03** 男子<女子	1.60 n.s.
M機能	14.89 (3.45)	15.57 (3.71)	15.53 (3.50)	16.24 (3.07)	16.34 (3.16)	16.60 (3.21)	9.88*** 1<2, 3	6.07* 男子<女子	0.42 n.s.

( ) 内は標準偏差。\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

年生<2年生<3年生であった。さらに性の主効果も有意で、女子の得点が高かった。第7因子「M機能」は学年の主効果が有意で、1年生<2年生=3年生であった。さらに性の主効果も有意で、女子の得点が高かった。したがって、学級集団教育的相互作用測定尺度の下位因子は学年が上がるにつれて得点が高まること、またクラスメイトに対して発揮されるリーダーシップを表わす「P機能」「M機能」や他者に対する思いやりや優しさをあらわす「愛他性」は女子が高いことが明らかになった。

### 3. 学校生活意欲尺度(スクールモラルスケール)との関連

学級集団教育的相互作用測定尺度の下位因子と生徒のスクールモラルとの関連を明らかにするために相関係数を求めた(Table 3)。結果、学級集団教育的相互作用測定尺度のすべての下位因子において、学級との関係の因子と中程度以上の正相関があった。また、集団圧、集団士気、愛他性、M機能において友人関係の因子と中程度の正の相関があった。さらに、教師との関係の因子と集団圧、M機能に中程度以上の正相関があった。学習意欲とは集団圧、集団士気とに弱い正相関が認められたが、進路意識とは有意な関連は認められなかった。

Table 3 学級集団教育的相互作用測定尺度(中学校版)とスクールモラルの相関係数

	集団凝集性	P機能	斉一性・ 自治体制	集団圧	集団士気	愛他性	M機能
友達関係	.46***	.34***	.33***	.44***	.43***	.45***	.49***
学習意欲	.16***	.26***	.32***	.34***	.35***	.24***	.26***
教師との関係	.38***	.35***	.33***	.44***	.44***	.38***	.43***
学級との関係	.65***	.50***	.51***	.70***	.67***	.66***	.61***
進路意識	.11***	.19***	.23***	.21***	.22***	.25***	.19***

\*\*\* $p < .001$

## 【考察】

本研究は、河村(2012c)が指摘した生徒の学級生活の満足度と意欲、学習の定着が良好な学級集団の状態像、学級集団内での教師と生徒や生徒間での相互作用の態様に関する記述を尺度化したものであったが、学級集団教育的相互作用測定尺度は因子分析の結果、河村(2010c)が指摘した構造どおりの結果が得られ、河村・武蔵(2012a)が作成した小学校版とも同様の因子構造であった。満足型学級集団は成立要因と維持要因が想定されるが、下位因子同士は内部相関が高く、この構造はとても密接に作用する関係になっていると考えられる。

また、河村・武蔵(2012a)が作成した小学校版では、7つの下位因子には学年差及び男女差がなかったが、本研究で作成した中学校版は、学年が上がるにつれて得点が高まること、また「P機能」や「M機能」、「愛他性」は女子が高いことが認められた。小学校から中学校に移行する中学一年の学級ですべての値が有意に低くなっており、中学一年で不登校が急速に増える背景に、この実態がある可能性が示唆される。さらに、多くの生徒が思春期を迎える中学校では、発達から生じる性差の問題を考える必要があると思われる。

## 研究2

### 【目的】

研究2では、学級集団に所属する子どもたちの集団同一視の高さを測定する尺度を作成することを目的とした。

### 【方法】

**調査対象** 3校 808名(男子400名、女子408名、1年生248名、2年生288名、3年生272名)

**調査内容** 調査対象の生徒に2つの尺度を実施した。1つは本研究者と心理学を専攻する大学院生3名、現職教師2名により河村(2012c)をもとに内容を検討した全15項目の学級集団同一視測定尺度であった。評定は「4:とてもそう思う」から「1:まったくそう思わない」までの4件法である。もう1つは、生徒の学級や

学校場面における意欲について、標準化された尺度である「学校生活意欲尺度(スクールモラルスケール)(中学生用)」(河村, 1999)であった。評定は「5:とてもそう思う」から「1:まったくそう思わない」までの5件法である。単純加算により各因子の得点を算出する。

## 【結果】

### 1. 学級集団同一視測定尺度の因子分析結果

学級集団同一視測定尺度に対して、最尤法・Promax回転による因子分析を行った。因子負荷量が.40に満たない項目、因子負荷量が2つ以上の項目に.40以上を示す項目はなく、固有値の推移と解釈可能性から3因子解を採用し、因子負荷量の高い順に各因子5項目ずつの15項目が採択された。結果をTable 4に示す。第1因子「このクラスでは、先生に自分の悩みを安心して話すことができる人が多い、と思いますか」「このクラスは、先生に自分たちの思っていることを気軽に話せる人が多い、と思いますか」などの項目が高い負荷を示し、「教師に対する同一視」の因子と解釈した。第2因子は「自分のクラスがほめられると、うれしく感じることがありますか」「運動会などで、クラスみんなで頑張ることが楽しいと感じることが多い、と思いますか」などの項目が高い負荷を示し、「学級に対する同一視」の因子と解釈した。第3因子は、「このクラスでは、教えあうことが多い、と思いますか」「このクラスでは、つらくなっている人を、心配する人が多い、と思いますか」などの項目が高い負荷を示し、「友人に対する同一視」の因子と解釈した。因子分析の結果をもとに構成した各下位尺度の信頼性係数は、「教師に対する同一視」が $\alpha=.887$ 、「クラスに対する同一視」が $\alpha=.892$ 、「友人に対する同一視」が $\alpha=.908$ であった。よって、学級集団同一視測定尺度の高い信頼性が確認された。

### 2. 学級集団同一視測定尺度の男女差と学年差

学級集団同一視測定尺度の3つの下位因子と性別、学年との関係を検討するために、各因子について学年(3)×性別(2)の分散分析およびBonferroni法による多重比較を行った(Table 5)。なお、有意な交互作用は認められなかったため、主効果の検討を行うことにし

Table 4 学級集団同一視測定尺度（中学校版）の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	
<b>F1 教師に対する同一視</b>				
このクラスでは、先生に自分の悩みを安心して話すことができる人が多い、と思いますか。	.915	.002	-.055	
このクラスは、先生に自分たちの思っていることを気軽に話せる人が多い、と思いますか。	.886	-.001	-.034	
このクラスは、先生のことを好きな人が多い、と思いますか。	.734	.012	.041	
このクラスは、先生の好きな言葉・よく言われる話を覚えている人が多い、と思いますか。	.720	.006	.005	
このクラスは、先生の言うことを素直に聞く人が多い、と思いますか。	.515	-.006	.230	
<b>F2 クラスに対する同一視</b>				
自分のクラスがほめられると、うれしく感じるがありますか。	-.047	.972	-.091	
運動会などで、クラスみんなで頑張ることが楽しいと感じることが多い、と思いますか。	-.087	.740	.152	
このクラスの子だねと言われると、うれしく感じるがありますか。	.105	.726	-.005	
このクラスには、自慢できることがある、と思いますか。	.070	.668	.142	
このクラスを、好きな人が多い、と思いますか。	.076	.455	.358	
<b>F3 友人に対する同一視</b>				
このクラスでは、教えあうことが多い、と思いますか。	.019	-.031	.837	
このクラスでは、つらくなっている人を、心配する人が多い、と思いますか。	-.001	.020	.812	
このクラスでは、友達のことを大事にしている人が多い、と思いますか。	-.049	.134	.758	
このクラスでは、友達どうしでよいことは、まねしあうことが多い、と思いますか。	.051	.061	.654	
このクラスでは、みんなで楽しい、うれしい、つらい、悲しいと感じて、笑ったり、泣いたりすることが多い、と思いますか。	.125	.244	.444	
	$\alpha$ 係数	.887	.892	.908
	因子間相関 F1	—		
	F2	.616	—	
	F3	.669	.799	—

Table 5 学級集団同一視測定尺度（中学校版）の2要因分散分析結果

	1年生		2年生		3年生		主効果		交互作用
	男子 (n=131)	女子 (n=117)	男子 (n=132)	女子 (n=156)	男子 (n=137)	女子 (n=135)	学年差 F値	性差 F値	F値
教師に対する 同一視	12.66 (3.66)	13.61 (3.31)	14.48 (3.46)	15.06 (3.48)	15.81 (3.40)	15.96 (3.30)	41.62*** 1<2<3	5.24* 男子<女子	0.88 n.s.
クラスに対する 同一視	15.25 (3.75)	14.50 (3.69)	16.54 (3.28)	15.85 (3.88)	16.49 (3.71)	16.13 (3.69)	12.11*** 1<2, 3	5.33** 男子<女子	0.23 n.s.
友人に対する 同一視	15.38 (3.55)	14.38 (3.42)	16.00 (3.10)	15.85 (3.41)	16.46 (3.13)	16.79 (2.92)	18.67*** 1<2<3	1.46 n.s.	2.75 n.s.

( ) 内は標準偏差。\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$



た。結果、教師に対する同一視は学年の主効果が有意で、1年生<2年生<3年生であった。さらに、性別の主効果も有意で女子の得点が高かった。クラスに対する同一視においても学年の主効果が有意で、1年生<2年生=3年生であった。さらに性別の主効果も有意で女子の得点が高かった。友人に対する同一視においては学年の主効果が有意で、1年生<2年生<3年生であった。したがって、学級集団同一視測定尺度も学年があがるに従い得点が高くなり、またクラスに対しては女子がより同一視することが明らかになった。

### 3. 学校生活意欲尺度(スクールモラルスケール)との関連

学級集団同一視測定尺度の下位因子と生徒のスクールモラルとの関連を明らかにするために相関係数を求めた (Table 6)。結果、学級集団同一視測定尺度の下位因子である友人に対する同一視、教師に対する同一視、クラスに対する同一視のすべての因子において、教師との関係および学級との関係の因子と中程度以上の正相関があった。また、友人に対する同一視とクラスに対する同一視において友人関係と中程度の正の相関があった。学習意欲および進路意識とは有意な関連は認められなかった。

#### 【考 察】

学級集団同一視尺度の下位因子として、教師との同一視、友だちとの同一視、所属集団との同一視の3つが明らかになった。これも河村 (2012c) が指摘した構造どおりの結果が得られた。下位因子同士は内部相関が高く、学級集団教育的相互作用測定尺度の下位因子と同様に、この構造はかなり密接に作用する関係になっていると考えられる。

また、河村・武蔵 (2012a) が作成した小学校版では、下位因子には学年差及び男女差がなかったが、本研究で作成した中学校版は、学級集団教育的相互作用測定尺度の中学校版と同様に、学年が上がるにつれて得点が高まること、教師とクラスに対しては女子がより同一視することが明らかになった。

学級集団同一視尺度の下位因子の得点も中学一年の学級ですべての値が有意に低くなっており、中学一年で不登校が急速に増える背景に、学級集団の教育的相互作用とともに同一視の面も含めて、環境側である学級集団の問題がある可能性が示唆される。同様に、多くの生徒が思春期を迎える中学校では、発達から生じる性差の問題を考える必要があると思われる。

#### 【全体考察】

中学校版の学級集団教育的相互作用測定尺度と学級集団同一視測定尺度は、複数の観察者が年間を通して記録した観察研究から得られた知見 (河村, 2012c) とおりの因子構造が得られ、教師が学級経営を展開するにあたって、観察法による理解を補う資料を提供できる尺度として活用できると思われる。

また、中学校版の両尺度は質問項目がごく一部異なるものの小学校版の尺度 (河村・武蔵, 2012a) と同様の因子構造であることが明らかになり、満足型学級集団は同じような構造であると考えられる。これは小、中学校の観察記録を通して、複数の観察者が満足型学級集団は似ている、似たような雰囲気や児童生徒たちの行動パターンが見られる (河村, 2012c)、という指摘を支持していると思われる。

ただ、似たような雰囲気や児童生徒たちの行動パターンが見られる満足型学級集団も、河村・武蔵 (2012a)

Table 6 学級集団教育的相互作用測定尺度(中学校版)とスクールモラルの相関係数

	教師に対する 同一視	クラスに対する 同一視	友人に対する 同一視
友達関係	.27***	.42***	.48***
学習意欲	.20***	.22***	.23***
教師との関係	.48***	.44***	.41***
学級との関係	.46***	.65***	.64***
進路意識	.16***	.22***	.25***

\*\*\* $p < .001$

が作成した小学校版と本研究の中学校版とでは主に次の2点で相違が認められた。(1) 小学校では下位因子には学年差及び男女差がなかったが、中学校版では両尺度共に学年差と性差が認められた、(2) 小学校では児童の友人関係や学習意欲と学級との関わりに学級集団との関連がトータルに認められたが、中学校では生徒たちの学習意欲との関連が他の領域よりもその関連が少ない、など、小学校と中学校の学級では個人に与える関連は微妙に異なることが示唆された。

このような差異が認められた背景には、①学級担任制の小学校と教科担任制の中学校という学級集団のあり方の違い、②小学校版では同じ学校で進級した学年での検討であるが、中学校1学年は学校種も変わった状態での調査であり、中学校2,3学年は同じ学校で進級した学年での検討であるという違い、③児童と生徒との発達の違い、などが考えられる。

①では、中学校では学級のメンバーは同一でも授業ごとに担当する教師が変わるので、授業ごとに学級集団の雰囲気は微妙に変わることが想定される。観察記録でも、集団としても成熟が低い学級でそのような傾向が高いことが報告されている。小学校では授業不成立はそのまま学級崩壊につながるが、中学校では学級が崩壊状態までは悪化していなくても特定の教師のときのみ授業不成立になるという状況はあるわけである。また、中学校で各教師が授業を進める上で、最低限の展開の方針が学年団で共有されている場合と、そうではない場合とではその関連に差が生まれると思われる。

②では、特に中学校一学年の学級経営の難しさが考えられる。この点は「中1ギャップ」として不登校問題の中で注目されている。小学校-中学校の学校生活や活動の大きな変化が、子どもたちの適応に強い影響を与えているのである。特に、小学校で多い「なれあい型」学級集団と中学校で多い「管理型」学級集団の大きな集団の状態の差と、さらに①と関連するが小学校までは先生に個別に対応してもらうことが多かったのに、中学校になったら一斉に指示を出されることが多くなり、その指示を受けて自己判断して行動しなければならない。このような中で、特に小学校時代に教師から個別対応を受けながらなんとか生活・活動してきた子どもは、徐々にどうしていいかわからず、学業不振や学級不適応に至ってしまう(河村, 2010b)の

である。

③では、思春期に入ると女子は親和的な関係を維持しようとする傾向がある(西村・長野, 2008)と指摘されるように、中学校に入ると性差が顕著になってくることがその背景にあると考えられる。

したがって、本研究で作成された2つの尺度は、性差と学年差に配慮して活用されることが期待される。ただし、本研究では8学級での分析であり、より多くの学級を対象に調査を実施し、慎重に検討することが求められると思われる。今後の課題としたい。

## 【引用文献】

- Fraser, B. J., Anderson, G. J., & Walberg, H. J. 1982 Assessment of learning environments : Manual for learning Environment Inventory(LEI) and My Class Inventory (MCI). Perth : Western Australian Institute of Technology.
- Graham, S. & Golam, S. 1991 Motivational influences on cognition: Task involvement, ego involvement, and depth of information processing. *Journal of Educational Psychology*, **83**, 187-194.
- 狛江市教育委員会 2014 平成 25, 26 年度研究協力校(狛江第三中学校) 研究報告書「学級集団作りを基盤とした意欲の向上」
- 早津明彦 1995 組織開発と経営革新 田崎醇之助・青木修次(編)「産業心理学トッデイ」八千代出版
- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 (1) - 学校生活満足度尺度 (中学生用) の作成 - カウンセリング研究, **32**, 274-282.
- 河村茂雄 2010a 日本の学級集団と学級経営 図書文化社
- 河村茂雄 2010b “中1ギャップ”を克服する学級づくり 教育と医学(慶應義塾大学出版会), NO.681, 29-35.
- 河村茂雄 2012 中学生の学習・友人関係形成・学級活動意欲を向上させる学級集団形成モデルの開発 平成 24~26 年度科学研究費「基盤研究(C) 課題番号 24530836」研究成果報告書(中間報告)
- 河村茂雄・武蔵由佳 2008a 学級集団の状態といじめの発生についての考察 教育カウンセリング研究

## 2, 1-7.

- 河村茂雄・武蔵由佳 2008b 一学級の児童生徒数と児童生徒の学力・学級生活満足度との関係 教育カウンセリング研究, 2, 8-15.
- 河村茂雄・武蔵由佳 2012a 学級集団内の教育的相互作用と集団同一視を測定する尺度の作成 学級経営心理学研究, 1, 32-43.
- 河村茂雄・武蔵由佳 2012b 学級集団の状態と教育的相互作用の関係の検討 学級経営心理学研究, 1, 21-31.
- Moos, R.H. 1979 Evaluating Educational environments. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- 根本橋夫 1981 「学級集団づくり」の心理学的研究—「全生研」の実践の実証的検討— 心理科学, 4, 8-18.
- 根本橋夫 1983 学級集団の構造と学級雰囲気およびモラルとの関係 教育心理学研究, 31, 211-219.
- 西村麻希・長野恵子 2008 現代青年の友人関係と対人ストレスに関する研究, 西九州大学健康福祉学部紀要, 39, 65-71.
- Silbergeld, S., Koeig, G.R., & Manderscheid, R. W. 1975 Classroom psychosocial environment. *Journal of Educational Research*, 69, 151-155.
- Silbergeld, S., Koeig, G.R., & Manderscheid, R.W. 1976 Assessment of the psychosocial environment of the classroom: The Class Atmosphere Scale. *Journal of Social Psychology*, 100, 65-76.
- Trickett, E. J., & Moos, R. H. 1973 Social environment of junior high and high school classrooms. *Journal of Educational Psychology*, 65, 93-102.
- Trickett, E.J. & Moos, R. H. 1995 Classroom Environment Scale Manual: Development, applications, research (3rd ed.), Palo Alto, Cal.: Consulting Psychologists Press.

## 付記

2012年4月～2015年2月までの中学校を対象とした研究は、文部科学省の科学研究費補助金「基盤研究(C) 課題番号24530836」を受けて行われた。

(2014年12月18日受稿, 2015年2月1日受理)

## Appendix 1

教育的相互作用の高い学級を抽出するために、調査を実施した学級から、以下の3つの条件を全て満たした学級を抽出した。

- (1)「Q-U」の得点が全国平均値と比較して、生徒の学級生活満足度、学習意欲や友人関係形成意欲、学級活動意欲の各得点の学級の平均値が有意に高い得点になっている。
- (2)「NRT」の国語と数学と英語の学級の平均値が全国平均値と比較して、有意に高い得点になっている。かつ、学級内のアンダーアチーバーになっている生徒の出現数が全国平均値と比較して低い値になっている。
- (3)4人の観察者のうち3人以上が、次の2点について他の学級と比較して良好である・確立していると判断した。○個人の士気と同時に集団士気が高まっている、○集団生産性が高まる取り組み方法・協同体制・自治体制が学級内に確立している。

以上の手続きを経て8つの学級を抽出(以後、満足型学級集団と表記する)し、4人の観察者が観察データを、学級内の生徒の行動、集団としての動きについてKJ法で整理した。なお、抽出された学級は1学年2クラス、2学年3クラス、3学年3クラスであり、特定の学年に偏ることがなかったので、学年差を考慮せずに整理した。

①個人の士気と同時に集団士気が高まっている、②集団生産性が高まる取り組み方法・協同体制・自治体制が確立している、という指標とそれを成立させている下位要因として、③集団斉一性が高くなっている、④集団内の子どもたちの自己開示性と愛他性が高まっている、⑤集団凝集性が高まっている、があり、③④⑤を維持する要因として、⑥集団機能・PM機能が子どもたち側から強く発揮されている、⑦⑥を強化する集団圧が高まっている、が整理された。さらに、抽出した8学級では、教師と生徒たち、生徒たち同士の関係性で、他の学級と比べて集団同一視の高さが観察された。下位領域として、○担任教師に対する同一視、○学級内の生徒同士の同一視、○学級集団自体への同一視、の3つの面であった。協同体制や自治体制が確立し、かつ、集団同一視の高さが加わったとき、学級集団は共同体の雰囲気を観察された。

*Developing a Scale to Measure Educational Interaction and Group Identification within  
Junior High School Classrooms in Japan*

*Shigeo Kawamura (Waseda University), Yuka Musashi (Morioka University)*

The purpose of this study was to develop the Classroom Educational Interaction Measurement Scale (for junior high school), as well as the Classroom Identification Measurement Scale (for junior high school), to measure educational interaction within Japanese classroom. The subjects were, 923 junior high school students (466 males and 457 females; 282 first graders, 342 second graders, and 299 third graders) for the first study, and 808 junior high school students (400 males and 408 females; 248 first graders, 388 second graders, and 272 third graders) for the second study. By the factor analysis of the Classroom Educational Interaction Measurement Scale, 7 factors (group morale, uniformity and autonomous structure, altruism, group cohesiveness, Performance function, Maintenance function, and group pressure) were extracted, and the reliability is confirmed. Then, by the factor analysis of the Classroom Identification Measurement Scale, three factors (identification with the teachers, identification with the friends, and identification with the class) were extracted, and the reliability is confirmed. Furthermore, relation with the school life satisfaction scale was examined.

**Key word :** classroom educational interaction measurement scale, classroom identification measurement scale, junior high school students